

フォローアップ委員会意見対応表

【猿谷ダム】

平成20年 3月

近畿地方整備局
紀の川ダム統合管理事務所

【猿谷ダム】

1. 事業の概要
特になし

2. 流水調節
特になし

3. 利水補給
特になし

4. 堆砂
特になし

5. 水質

項目	意見	整理状況	今後の対応方針
5.6 水質保全施設の評価 本編 P5-201～ 概要版 P35	<p>・濁水対策にあたっては濁水放流のメカニズムを解明するとともに、具体的な対策について検討していくことも重要である。（阪本取水口の）底部から濁りを引き込んでいるとすれば、表層取水に改造するのも一つの方法である。</p>	<p>・貯水池内の濁水長期化現象のメカニズムや堆砂土砂との関係について把握するための濁度の連続観測を今年度より実施している。 また、表層から取水できるよう阪本取水口の改造工事を現在実施中。</p>	<p>・今後観測を継続し、状況把握に努める。</p>
5.6 水質保全施設の評価 本編 P5-201～ 概要版 P35	<p>・猿谷ダムの特殊性として洪水の流入濁水は、貯水池の中に溜め込んでしまい、取水により貯水池内を乱し、濁りを動かしやすい運用になっている。濁水対策として、例えば洪水時に中層から放流ができる設備を設け、洪水時に濁りを溜め込まないダムの改造も場合によっては考えたほうがよいと思われる。</p>	—	<p>・今後検討を行う。</p>
5.6 水質保全施設の評価 本編 P5-201～ 概要版 P35	<p>・貯砂ダムの堆砂は有効利用の可能性のある土砂であり、除去することも考えて欲しい。また、除去しないことで河床が上がり取水口との距離が短くなって、土砂を引き込み易く、巻上げしやすい環境になっているので、堆砂対策は濁水対策とセットで考えた方がいい。</p>	—	<p>・今後も検討を行うこととし、相談しながら進めていきたい。</p>

6. 生物

項目	意見	整理状況	今後の対応方針
6.3 生物の生息・生育状況の変化の検証 本編 P6-55 概要版 P45	<ul style="list-style-type: none"> ・魚類の分布が特定のところだけ記載されており実際の分布が分からない。ダム湖内における魚類の確認状況として個体数が書かれているが、調査方法を考慮して整理すべきである。また、解析の方法も検討して欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・努力量や調査方法については、本文巻末の「参考資料」に掲載。 	<ul style="list-style-type: none"> ・魚類の分布等、できるだけ正確になるよう今後努力したい。 また、解析方法について、今後ご指導をお願いしたい。
6.3 生物の生息・生育状況の変化の検証 本編 P6-127, 135 概要版 P51	<ul style="list-style-type: none"> ・重要種について、「生息・生育状況の変化の要因は不明」と記載されているが、「要因」ではなく、「実態」ではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 【委員会の意見により修正】 「環境条件に変化があったかどうか不明であるため、変化の要因は不明である。」を削除。 「動物種の確認の偶然性を考慮すると、生息状況の変化の実態は不明である。」に修正。 	—
6.2 ダム湖及びその周辺の環境の把握 本編 P6-27, 22, 126, 143	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書（案）に、底生動物の幼虫（ムカシトンボ）は確認されているのに、成虫（昆虫類）では重要種はない、などの記述があるので再度確認する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 【委員会の意見により修正】 「猿谷ダム周辺においては、奈良県のレッドリストで希少種に指定されているムカシトンボなど、合計1綱3目5科5種の貴重種を確認した。」を追記した。 	—
6.3 生物の生息・生育状況の変化の検証 本編 P6-87 概要版 P48	<ul style="list-style-type: none"> ・下流河川の生物の生息・生育状況の変化で、例えば底生動物が減になっているが、比較し得るデータと比較した結果か。 ・平成11年は秋のデータが16年は冬のデータがない、これを比べるとすれば春と夏であるが夏の変動は2年くらいの間で変動する範囲という考えもある。可能性としてはあるがデータ不足でなにも言えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・得られたデータを基に分析しており、厳密な意味での比較はできていない。調査は5年毎に実施しているが、調査によつては必ずしも全く同じやり方ではない。調査方法はわかっているが比較ができるものになっていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後、整理方法や調査方法については過去の調査との相関も含めて整理するよう、検討を行う。

項目	意見	整理状況	今後の対応方針
6. 生物 (全般) —	・観測データの精度が目的とするものに対して適切なのか、堆砂量の変動も含め検討して欲しい。	—	・今後、データの精度も含め、調査方法について検討を行う。
6.3 生物の生息・生育 状況の変化の検証 本編 P6-96, 97 概要版 P49	・精度については植物も同様な問題がある。例えば外来生物のオオカワヂシャが確認され、外来種数が徐々に増加していると記述しているが、在来植物、外来種の種類も増えている。報告書の群落調査でも平成6年は14地点、平成9年25地点で行っており、基となるデータが異なっている。中身がどう変わっているかわかる資料がないと植生が変化しているかどうか分からない。図6.3.33の「植物の外来種確認種数の変遷」について、各年度のルート距離、ポイント数（調査区数）を入れ、対象面積とルートが異なることを明記すべきである。また、草本と木本をわけて示し、情報が明確にした方がよい。	・図6.3.33「植物の外来種確認種数の変遷」について、各年度のルート距離、調査コードラート（地点）及び草本と木本を区分して一覧表にした。	—
6.3 生物の生息・生育 状況の変化の検証 本編 P6-97	・植物調査のニセアカシア群落、アレチウリとスギーヒノキ林との関係、外来種がその後どうなっていったか等についてコメントできないか。	・現時点では、当初から植栽されたものかどうか把握できていない。	・今後の検討課題とし、調査方法を考慮するなど把握に努める。
6. 生物 (全般) —	・河川水辺の国勢調査を行うときに、ダムフォローアップに必要なデータと心得て行うことが必要。	—	・河川水辺の国勢調査の調査内容については全国的な調査要領に基づいており課題として議論していく必要があるが、今後の調査の実施にあたってはご意見を活かすよう努めていく。

7. 水源地域動態

特になし